仙台教区報

カトリック仙台司教区事務所
〒980
仙台市青葉区本町1丁目2番12号
☎ 022（222）7371
FAX 022（222）7378
編集・発行　板垣　勤

家庭にもっと「みことば」を

教区司祭大会行なわれる

教区では昨年に引き続いて、教区司祭大会を開いた。今大会は52名の司祭が出席し昨年の大会の最終日に話された、信徒が聖書に親しみもっと聖書を知るために司祭がどうすればいいのかというテーマに取り組んだ。

これは司祭、すべての信徒の信仰生活の基本に関わることでもあるので、講話などを聞き、話し合うことにした。大会のテーマは「家庭でみことばを共に生きる」サブテーマは「司祭に求められていること」であった。

講師のマルセル・ルドールズ神父（パリ外国宣教会）は、「みことばは心、体、信仰を養うための食べ物だから、自分で読まなければならない。読むために手引きをする人と一緒に読む人がいるのが望ましい」ことを強調した。また、中国では家庭を中心として教会が生きたものとなっていることを話し、聖書通読のため自分が日本で始めた「聖書百週間」を紹介した。司祭が少ない中国の教会の話しは全国会議のテーマに直接に関連することだけに非常に興味深いものであった。

大会二日目は佐藤司教の話を聞いた後、司祭たちが仙台教区の宣教司牧体制についてグループディスカッションをして意見を交換しあった。

仙台教区は今年司祭召命促進キャンペーンを行なっているが、それと同時に信徒が信仰にもとづいて自主的に生き、教会を支えていくために、司祭がどのように援けを与えられるかについて話し合った。話し合いは来年度の教区の宣教司牧体制を考えるための材料を出すことにもなった。

全体会で発表された7つのグループの意見は多様であったが、現在の宣教司牧体制を積極的に見直し、信徒の果たす役割と責任を明確にし、それを果たしてもらうため教区全体が具体的に動かなければならないとの考えが共有されていることを感じさせるものであった。

現在実施されている「共同司牧」については、更に推進するという方向性が見えたが「共同司牧」に司祭間の共通理解があるのか？など、見直しをしなければならないこともあることが指摘された。

教会の事業の現場から

家庭は神からの贈りもの

竹元　しのぶ
（ドミニコ女子修道会会）

現在、日本全国では児童福祉法第41条による養護施設が五百三十三ヶ所設置されています。私が勤めさせていただく仙台天使園は定員が80名で、2才から18才まで64名の子供たちが23名の職員と生活を共にしています。

在園児の主な入所理由はつぎのようになっています。まず多いのは、若年結婚による家庭生活の未熟さからくる離婚であり、母親の子育ての放棄である。これは父親が親権を得ても、仕事のために養育困難になり施設に子供をあずける父子家庭を生むことにもなる。

第二は親がガンなどの病気のうえさらに精神障害・アルコール中毒であるケース。

第三はここ数年来増加している最も弱い立場にあるわが子への父母による虐待、さらに母親の家出、未婚の母、母親の病死などと続く。

これらに共通し考えさせられることは親自身も自らの成育歴に何かと不適切な家庭環境を持ち、人間関係の愛情が極めて希薄だったことによる連綿とした痛みを引きずっていることである。

しかし、親からひどい仕打ちを受け、身も心もズタズタに引き裂かれた子供も入所して何ヶ月かすると徐々に安定してくる。衣食住に満たされ職員たちの愛情に見守られて、日増しに気持ちが穏やかになり体重も知恵もふくらむ。そして、カトリックの養護施設ならではのお祈りの時、子供たちは職員と共に神に心からの願いを口にするようになる。

5才で入所したM子はひどい虐待を受けていたのでどうなるか案じられていた。しかし、この3年間で体重が倍以上になり、嬉しいことに笑顔が自然に溢れてくるようになった。天使園への訪問者がM子に会って「この子の笑顔はいいね」と口にされたこともある。

私がM子に感心することは共同祈願で、はじめの頃は何も言わなかったが、小3になり「お父さん、お母さんが仲良くしますように」と自分を苦しめた親のために祈るようになったことである。M子は夫婦ゲンカが絶えなかった家庭の争いを悲しみ、自分が育った家を思い出し、父なる神に親の和解を取り成している。

私は親自身が自分でとうてい乗り越えられない人間の業(ごう)のような家庭の苦しみを、子供が一心に祈ることによって確かにキリストの救いが親に届き、新しい力と希望を与え続けていると信じている。

園では、生命を育む子育てをちゃんと出来る女性を育てるために子供たちに正しい性のあり方、いのちの尊さをしっかり伝えなければならないと考えている。

ある時、「自分は生まれて来なければよかった…」と親を憎み、自分自身を大事に出来ない思春期の中高生に、園内の宗教クラブ活動で「いのちの尊さ」というビデオを見せた。

ビデオを見た後、ある高校生は「あー、やっぱり産んでもらってよかった」とホッとした声でつぶやいていた。一緒に見た他の中高生も「私は絶対子供はおろさない」と感想をもらした。

この子たちが将来結婚して家庭を持つとき、地域社会で古いしがらみに取り付かれてまわりの目を気にするより、良心の声に忠実に生き、それぞれの家庭が神様からの贈りものとして受け取り、喜びを分かちあえますようにと願っている。

家庭が神からの素晴らしい贈りものであるという喜びは善良な夫に出会い、玉のような赤ちゃんを抱いて来園する卒園生の家族を目のあたりにする時実感させられる。

信仰をいただいている私たち一人ひとりが自分の置かれている場で、最も身近かな人と「主こそ、わが光」と共に祈れるようになりたい。私は自分の無力を認めるときに、キリストの光が静かにしかも溢れんばかりに注がれてくると信じている。

盛岡白百合学園 創立百周年を祝う

一八九二（明治25）年に、パリ外国宣教会から招かれて、岩手県初の女学校「盛岡女学校」を創立したシャルトル聖パウロ修道女会が経営する盛岡白百合学園は今年、創立百周年を迎えた。

学園の長い歴史の中で大きな出来事は、昭和57年に創立の地、盛岡市の中心部から郊外に移転したことである。それによって学園は広い敷地の中に白亜の校舎を持つすばらしい教育環境を整えることができた。そのうえに、今回創立百周年を迎えた学園は新たに百周年記念講堂を加わえ、教育施設は一段と充実したものになった。

創立百周年記念の最大の行事は記念講堂を会場に、10月26日の感謝ミサ、27日には岩手県内外から約四百名近い来賓を迎えた記念式典、祝賀会であった。

感謝ミサは仙台教区や学園に関わりある東京教区の司祭など28名による共同司式で荘厳に行なわれ、小・中・高校生、教職員修道女ら約千三百名が、学園の百年の歩みを見守り続ける神と多数の恩人方へ感謝を捧げた。

式の中で司祭たちの祈りに呼応して生徒たちが合唱するラテン語のミサ曲には熱がこもり、最後のハレルヤコーラスは特に感動的であった。

27日の式典は教区長・佐藤司教も参列して祝辞を述べ、仙台教区への貢献に感謝を表わすとともに、シャルトル聖パウロ修道女会の創業時の苦難を偲び、創立の精神を継承している学園関係者へ賛辞と励ましの言葉を贈った。

学園では、「ひらこう盛岡白百合の新世紀」のスローガンのもとに、5月から各種の記念事業、諸行事を開催してきた。

記念事業の一つとして、「一粒の麦　地に落ちて」と題する盛岡白百合学園創立百周年記念誌が発行された。同誌は岩手県におけるカトリック教会史、一万六千余名の卒業生を育てた学園の教育史であり、またシャルトル聖パウロ修道女会の宣教活動史でもあるところから、貴重な記録として各方面から注目されている。

新築ニュース二題

○オタワ愛徳修道女会は弘前修道院を新築し、11月23日に祝別落成式を行なった。同修道院は今まで弘前大清水ホームに借家住まいをしていたが、ホーム隣接地に自分たちの家を持つことになった。建物は住宅地にある2階建てで、教室となる部屋などを備えている。

○大河原カトリック幼稚園園舎建て替え工事は12月中に終わり、クリスマス前に引っ越しをする。落成式は来年2月に予定している。

終生誓願式

12月6日にオタワ愛徳修道女会では佐藤司教の司式で、多数の参列者のもと佐藤久美子さんの終生誓願式を行なった。

神に感謝

佐藤　つや子（一本杉教会）

私は今、87才です。体調の良い時は日曜日が待ち遠しい。ミサが始まり、そして、ご聖体をいただく時、神父様が「キリストの体」とおっしゃり、私は「アーメン、ありがとうございました」とつい口から出てしまう。今までの人生を振り返る時、色々な点で神様に感謝をせずにはいられないのです。

私は病弱な夫と5人の子供をかかえて、その日の糧を得るために働かなければなりませんでした。仕事の関係で教会に行くことも出来ず、一部の信者の方から教会に来ないと責められ、とても悲しい目にあった時もありましたが、私は忍耐し神様は今私が教会に行かれなかったこと、きっと赦してくださる。いつかはきっと教会に行ける時があると頑張ってまいりました。

そして、月日は流れ5人の子供たちも神様のお恵みを受けてそれぞれ結婚し、私もやっと教会に行くことが出来る日がまいりました。主人は昭和58年に神様に召されました。今は5人の子供、そして、孫9人、ひ孫4人に恵まれ87才の現在まで生きられるなど本当に夢のようです。

働いている時、皆様から得た親切、そして助けがあってこそ今の私があるのです。皆様方から得た助けを通して神様からお恵みの数々、本当に感謝でいっぱいです。

私は「聖母の騎士」を読むことが好きです。マリア様のこと、教えられることがいっぱいあります。水を使う時、そして、トイレに行く時など「マリア様、どうぞ使わせてください」とつい口から出てしまいます。これから、どれ程生きるか私にはわかりませんが、神様に召される日まで心を静かに祈りのうちにすべて感謝のうちに一日一日を大切に過ごしたいと思います。

（娘さんが聞き書きしました）

各地の教会報より

じさま、ご苦労さまでした

千葉大輔（浪打教会）

じさま、長い間、ご苦労さまでした。

じさまは、自分の思う通りに生きた人でした。つらい思いもしたでしょうが、持前のがんこさだけは誰にも引けをとりませんでした。じさまの九十年近い生涯を思うとそれと同じ気性が自分の中にも息づいているとしみじみ思います。

私はじさまの血を引くものです。でも、じさまと同じことを喜び、同じことに涙するにはどれ程の歳月がかかるのでしょう。

じさまは、ぶ厚い胸板と大きなこぶしの持ち主でした。私はそのじさまから好きなものにはトコトン熱中する性質を受け継ぎました。でも、ひらめくアイデアと働き者のまめさはまだ及びません。

冬に家中の雪囲いをするのはじさまの仕事でした。このドアは金鎚の頭を重りに使った自動ドアでした。

また、じさまは庭にブドウ棚も作りました。ここで取れる新鮮なブドウを家族は毎年楽しみにしていたものです。私のために鯉のぼりも立ててくれました。団地の中では一番高いものでした。おかげで五月には子供ながらに自慢に思ったものです。

じさまは大変な発明家でした。道具と材料さえあればじさまは発明の王様であったのでした。しかし、それも今日限りに思い出となります。じさまの九十年近い生涯を思うと、私はまだ入り口に立ったばかりです。じさまと同じことを喜び、同じことに涙するのには、どれ程の歳月がかかるのでしょう。

それまでの長い道のりを、ばさまと二人で天国から見守っていてほしいです。じさま、長い間、本当にご苦労さまでした。

祖父千葉秀一さんへ、孫の大輔さんによる弔辞です。
― 浪打教会報 ―

カソック仙台に「アンジェラスの会」

昨年9月に第4回カ障連（カトリック障害者連絡協議会）総会を開いたカソック仙台（代表・青山里恵子）内に、「アンジェラスの会」と名付けられた、仙台教区視覚障害者のグループが活動を始めた。

同会は、障害者がともすれば孤独感に陥って自らを閉じ込め、希望を失くしがちであることを思い、同じ障害を持った3、4人が集まり共通の喜びや悩みを分けあうことで、そこから光を見出せるのではと考えている。

そのため会では、障害があるということで、「こうして、ああして」と他人に要求するばかりではなく、教会共同体の一員として、自らが弱い立場であるとはいえ自分たちでできることは自分たちでしようと、13名の会員が会長の小川利秀（石巻教会）さんを中心に10月にシンポジュウム、12月には祈祷会を開催してきた。

カソック仙台としても、一人ひとりの障害者が尊敬と愛を分かち合い、全ての人と連帯できる人格の持ち主として、視覚障害者にならって聴覚障害、車イス使用の人たちも社会の中でグループをつくるなど、積極的に自分たちの生きる場を作り出してほしいと願ってる。

今年は、障害者が人間社会の大切な構成員であることに社会の目を向けさせた国際障害者年が始まって10年目にあたっているが、「アンジェラスの会」では会員の募集と同時に、多くの人が教区の中で手を取り合って楽しい人生にしようとしている障害者に、理解と協力の手を差し伸べる援助会員を求めている。

『釜ヶ崎　～のためにから共にへ』

大竹　美菜子（一本杉教会）

先日、釜ヶ崎在住のイエズス会の薄田昇神父を迎えて行なわれた正平協社会問題勉強会、「釜ヶ崎から見た日本－キリスト者の視点－」について少し紹介します。

釜ヶ崎は、日雇い労働者の街です。そこに住む人たちは高度経済成長を肉体労働で支え、不況の時は仕事が無く、人間が最低限必要とする衣食住さえ満足ではない状況です。去年5月百人だった炊き出しの列に今年9月には既に七百人が並び、食べるお米はたった30キロ！雑炊とは名ばかりの食事。冬の季節を迎え列はもっと長くなるでしょう。

釜ヶ崎で働き今は病気で体が不自由になったある牧師は労働者の列を見ながら、薄田神父に「昔は炊き出しをする側にキリストがいると思っていた。でも今は炊き出しの列の一番最後にキリストがいると思う」と話したそうです。実際、今も釜ヶ崎では「弱い人」が列の最後になるそうです。

キリストは労働者でした。並んでいる間寒さと食事がもらえるか不安で震えている人に、キリストは言うでしょう、「心配しなくていい。おまえの気持ちは私が一番知っているよ」と……。

「バブル経済の崩壊」という言葉を聞くようになって、どれだけ経ったのでしょうか。不景気だと言いながら、食べるもの、住むところ、そして仕事には困らない自分がいます。今キリストがいたとしたら、いったいどこにいるのでしょう。

釜ヶ崎で活動しているキリスト信徒からの反省。それは『「～のために」から「～と共に」へ』、だそうです。苦しむ人のために何かしてやろうではなく、キリストにならって苦しむ人の側に立ち、心を合わせることが出来たら。自分がどのようなキリストについていくのか、何を大切にしていくのか、そして今仕事が無く、飢えと寒さに苦しんでいる人を目の前にして何をすべきなのか……。私も祈りを力として、キリストと共に、行動したいと思います。

最後に、薄田神父が働いている釜ヶ崎キリスト教協友会ではお米などの食料品、防寒用品、運営資金の寄付を求めています。

送り先は

五六　大阪市西成区萩の茶屋2－8－9

「旅路の里」まで

メキシコ旅行記

司祭叙階式に出席して

渡辺恵子（須賀川教会）

私は8月10日から20日まで友人とメキシコに旅行してきた。第一の目的はグアダルペ宣教会のエミリオ、イグナシオ両助祭の司祭叙階式に出席することでした。

北海道から広島までの総勢20名。全員が信者の私たちは成田空港から、中継地のダラスへ出発した。日付変更線を越えてダラス空港着。そこから、夕方にメキシコへ向けて出発し、2時間後にメキシコ空港に到着。オレンジ色の点々と広がる夜景。海のようにどこまでも続くその美しさ。「きれいね。わぁ、すごい」と私は何度も口にした。「これが神父様たちのお国！」と夜景を見ながら幸福感を味わった。

翌日は3時30分起床。飛行機でユカタン半島へ。今回の旅の第2の目的はマヤ文明（日本では弥生時代）の遺跡巡りである。天文学を中心とした古代人の高度な文化に人間の神秘、偉大さを痛感させられた。

遺跡間の移動のとき、途中に貧しそうな家々が続いていた。私は食い入るようにその家を見た。どの家の戸口にも十字架やマリア様の絵が飾られている。素朴ではあるが、しかし一番大事なものを見た思いがした。胸が熱くなった。

8月15日は叙階式の日である。式は12時30分からであるが、私たちが着いたときにはグアダルペ大聖堂は既にたくさんの人が集まっていた。式までの少しの間、私たちはグアダルペの聖母が写し出された有名なマントを見せていただいた。一行の人たちはこのマリア様に「ぜひ、お目にかかりたい」というのが参加の動機であったとのこと。感激で涙ぐんでいた。

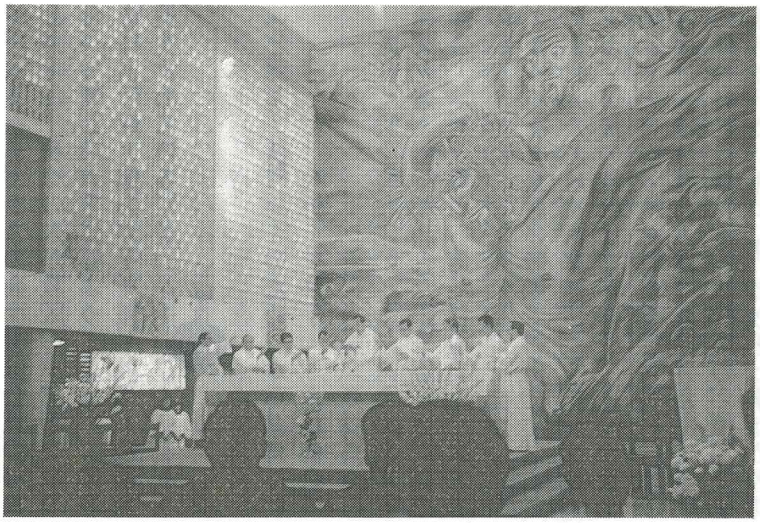
日本からの参列者のためには二階の中央に席が設けられていた。そこからは中央祭壇は豆粒のように小さく、どの人がエミリオ、イグナシオさんなのかわからない程である。一万人以上の人が叙階を受ける人のために心を一つにしていた。とても感動的であった。

私はスペイン語の式次第や歌も、分からないながらも、心を込めて読んだり歌ったりした。洗礼によって神の子としていただいた喜びが私を包んでいた。

翌日は新司祭の初ミサが神学校の聖堂で行なわれた。緊張感が漂う中にも二人の人柄がにじみでた、暖かな落ち着きのあるミサであった。ミサ後のミニパーティーでは「アーメン・ハレルヤ」を全員が肩を組んで歌った。

午後は須賀川教会の主任司祭だったエストラーダ神父様のお墓参り。神父様の愛唱歌だった「北国の春」を皆で歌った。涙があふれてしまった。

いよいよメキシコを離れる時。たくさんの思い出とおみやげを詰め、両神父様と日本での再会を約束し空港へ向かった。



神学校聖堂での初ミサ
（背景のキリストの絵がすばらしい）

滞日外国人援助活動について

日本では滞日外国人の問題が景気後退の影響でいよいよ大きな社会問題となってきている。この問題は滞日外国人の人権をどのように考えるか、具体的な問題で愛を実践するとはどういうことかなど、一人ひとりの信仰の実践を問うものになっている。

カトリック教会の動きを全国的に見ると中央協議会の国際協力委員会の中に「滞日外国人と連帯する会」があって定期的な会合を開き、情報交換、実際的な援助活動を続けている。各種の情報を載せた冊子「きずな」の発行はその働きの一つである。

仙台教区にもたくさんの滞日外国人が働くため、あるいは結婚によって日本で暮らすことになったなどいろいろな理由で滞在し、いろいろな所で出会うことが多くなっている。

小教区によってはミサに来る滞日外国人が相当な数となっているところもある。その多くはフィリピン、チリ、ブラジル、その他の国から、家族を養うためなどの事情を抱えて日本に働き口を求めて来ている。

そんな中で滞日外国人はいろいろの問題を抱えて、教会を尋ねて来るケースが年々増えてきている。

それぞれの人が抱える問題は多様であるが、言葉が通じないことが問題を複雑にするケースもよく見られる。たとえば言葉がわからないためにだまされたり、暴力を受けるなどは人権問題そのものである。

東仙台教会の実践

私たちは遠いところの話ではなく教区内でも同じ問題があることを、東仙台教会の活動を通して知り、滞日外国人とどのように関わり、力になっていくことができるかを考えてみたい。

東仙台教会のホアン・マルティネス神父は宣教師としてメキシコから来日し、自らも滞日外国人の一人だと話している若い司祭である。同神父はスペイン語を話すことから、多くのスペイン語を話す人たちから頼りにされ、多くの問題解決のために動き回っている。

その働きは仙台市内はもとより福島県、岩手県、場合によっては東北各地、東京方面にまで及んでいる。関わる問題は仕事・住居の斡旋、パスポート取り上げ、給料未払い、売春、結婚、仕事中の事故、交通事故、医療の問題など生活とお金、なにより直接に人権に関わる事柄である。

そして、それらの問題の大部分は一回で解決できることはほとんどなく、時には暴力団が関わっていることもあって解決が非常に困難となるのが実情である。そのため同神父は、教会に援助を求めてくる人たちに教会の建物を一時的に住まいとして提供したり、仕事の紹介、さらに月に4、5回は問題解決のために入国管理局に足を運んでいる。

今まで東仙台教会に持ち込まれ、取り扱った問題は、今年4月から10月の間に限っても28件にのぼり、月平均で4件となる。

同教会では問題解決に少しでも協力したいということから、信徒たちが「愛の一食運動」をすすめて滞日外国人のために献金を捧げている。また、近隣の修道院や仙台市で活動している「みやぎ外国人問題研究会」とも連絡を取りあって、滞日外国人のために働いている。

そのために教会はオタワ修道会で月一回行なわれている英語ミサで出会う滞日外国人と、信徒が手を取り合って少しでも多くの人たちのために尽くせるよう活動の輪を広げがんばっている。

なお、「みやぎ外国人問題研究会」は有志が集まって滞日外国人のために助けとなることを目的に活動するボランティアグループである。同会はスタッフ不足もあってそれぞれ時間を限っているが「外国人ホットライン」と呼ぶ電話回線や「みやぎ外国人クリニック」を開設し、東北各県に活動範囲を広げている。また、仙台市消防局と協力し「外国人救急カード」を作るなど、助けを求める外国人たちに手を差し伸べる活動を精力的に続けている。

窓を開ければ

東チモールのこと(3)

「仙台東チモールの会」羽倉　正人

「秋の東チモールキャンペーンが今年も行なわれた。アニー・イナシオさんという21才の娘さんが、東北では青森、弘前、盛岡、山形、八戸を訪れて、東チモールへの支援を訴えました。仙台では50名位の方が彼女の話を聞いてくださった。

一昨年来仙したファテマ・グスマオさんは5人の子供のうち東チモールで産んで、そして殺された3人の子供のことを語って行きました。彼女は母親の立場から殺されていった子供たちへの哀惜を訴えたわけです。そして、今回アニーさんは、逆に「残された子供の立場から」失踪（殺された）した父親への想いを語ったわけです。

いずれも「個人的」な証言でありながら個人の体験のみに終わらないというのが東チモールのおかれた不幸な状況であり、訴えであったと思います。二人の話はつながっていますが、それがすべての東チモール人の共通の境遇だというのです。60万人の人口のうち20万人が死んだというのですから。

★

昨年のサンタクルツ虐殺事件の死者についての調査を東チモール人自身が何か月もかけて行なった。インドネシア軍の監視の眼をかいくぐりながら、です。これは一人ひとりを特定していったものです。9月3日そのリストがポルトガルの人権団体によって発表された。それによると、死者二百七十三人、失踪者二百五十五人、負傷者三百七十六人です。大半が21才以下、ほとんどが30才以下の若者ということです。ちなみに、インドネシア軍の発表は19人、国家調査委員会の発表は50人だった。

この事件には後日談がある。裁判のことです。国際世論に押されてインドネシア当局は軍人（下級兵士）の何人かを処罰したが、最高刑は1年6ヶ月の懲役以下の軽いものです。それに比べて、ただミサに参加して追悼の意を表明しただけの東チモールの若者の方は、国家転覆罪で終身刑の判決まで受けています。サンタクルス墓地で当日殺されなかっただけ、「恩赦」だと思えというのでしょうか。

11月20日には東チモールの首都ディリで東チモール民族評議会の議長シャナナ・グスマオンが逮捕された。彼は東チモールの人々がもっとも敬愛し、信望をおいている指導者である。議長の身柄の安全が大変憂慮されている。私たちは緊急行動として彼の身柄の安全を保証するようインドネシア政府、国連、そして日本政府宛の要請ハガキを準備しました。協力をお願いします。

ミニ情報

首藤神父帰国

ブラジルでの宣教司牧を終えて、首藤神父は12月16日に成田空港に。今後のことは未定。

教育功労賞を授与される。

宮古市の小百合幼稚園園長、C・レンネル神父は11月5日に同市から教育功労者として表彰された。

テキスト完成

今年7月に教区生涯養成委員会が発行した「みことばを、今、共に生きる」は旧約聖書分だけだったが、今回、新訳聖書分も出来上がり一冊にまとめられた。申し込み、問い合わせは教区事務所まで。

編集後記

今年は教区召命促進キャンペーンが行なわれ、また第2回福音宣教推進全国会議に向けた準備が進められている▼教会の外ではクリスマスがもう来てしまったという気配である。でも、苦しみや寒さにふるえている人はあちこちにいる▼福音を聞いて生きることの楽しさと、難しさが自分の心に同居しているのを感じて一年を終わる